

# 「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の報告

## Report on the workshop of "right picture book for all"

林 左和子

文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、2012年～2014年8月に12回開催した「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の報告である。ここでいう「ユニバーサルデザイン絵本」とは、身体的・知的特性、年齢や文化などを超えて皆と一緒に楽しむことのできる絵本のことである。ユニバーサルデザイン絵本の制作を通して、ユニバーサルデザイン及び絵本の可能性への関心を高めることをワークショップの目的としている。これまで開催したワークショップについて、利用者アンケートなどをもとに振り返り、その効果と課題を考えた。明らかとなってきた課題は、限られた時間の中でユニバーサルデザインについて説明することの難しさ、ユニバーサルデザイン絵本のレベル及び芸術性の向上である。この課題に取り組み、ユニバーサルデザイン絵本ワークショップを発展させていきたい。

This paper is the report on the workshop of "right picture book for all" which held in 2012, 2013 and 2014. The purpose of the workshop is to get a participant to consider universal design and "right picture book for all". While holding a workshop, three problems have become clear. The first problem is the method of explanation of a universal design. The second is on the level of "right picture book for all". And the third is a level as art.

### 1. はじめに

2012年から、本学及び近隣の図書館等を会場に、ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ(以下UD絵本WSと略する)を開催している。ここでいうUD絵本とは、身体的・知的特性、年齢、そして文化などを超えて皆と一緒に楽しむことのできる絵本をさす。このUD絵本WSの目的は、絵本制作を通して、ユニバーサルデザインに関心をもってもらうことであり、また、触る、聞くといった五感を通して楽しむことのできる絵本の可能性を考えてもらうことである。

本稿では、2012年11月から2014年8月までに行った12回のUD絵本WSの活動概要を参加者のアンケート結果をまじえて報告するとともに、開催する中で明らかになった効果と課題をまとめた。

### 2. これまでの活動概要

#### 2-1UD 絵本 WS2012

第一回のUD絵本WSは、2012年11月11日10時30分～15時30分(12時～13時は昼休み)に、静岡文化芸術大学を会場に行った。事前にチラシを市内の小学校に配布したが、参加者は小学生2名と小学校教員1名であった。本学側の参加者は、教員4名(うち1名は非常勤講師)と学生7人である。

午前中に、本学のユニバーサルデザインを専門とする教員から講義があり、その後で、実際に触って楽しむことのできる絵本の紹介を中心に「UD絵本」の説明を行った。午後は、参加者が持参した材料及び用意した材料(紙粘土、ボタン、ペットボトルキャップなど身近にある材料)を使って、絵本の一場面を作成する時間とした。なお制作時にはこの時は、デザイン学部の学生が手伝っている。最後に参

加者が製作した作品を紹介して終了となった。

参加者はいずれも、アンケートでは「大変楽しかった」と書いてくれており、満足度は高かったことがうかがわれる。とはいえ参加者が少なかったことは残念であった。その理由としては、広報活動を十分に行うことができなかったこと、UD絵本自体わかりにくかったのではないといったことが考えられる。また、ユニバーサルデザインの基礎的な知識を小学校で学んでいる小学校4年生以上としたため、対象が限られてしまったこと、さらに午前から午後にかけてという時間設定であったことも参加しにくい要因となったことが考えられる。

参加した小学校教員は、子どもたちが作品を制作している間、ユニバーサルデザインを専門とする本学教員から、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」「インクルーシブデザイン」についての話を聞いていた。浜松市では、小学校4年生(または5年生)の総合の授業で「ユニバーサルデザイン」について取り上げている。教える教員がこのテーマについてさらに知識を持つことで、子どもたちの理解が深まると考えられる。

#### 2-2UD 絵本 WS2013

##### 2-2-1 静岡県立中央図書館(4月21日)

本学主催のユニバーサルデザイン絵本コンクール2012の入賞作品などの展示会の期間中の開催であった。昨年度の反省から、午前もしくは午後の方の開催の方が参加者が多いと考えられること、静岡県立中央図書館での開催のため県内各地から無理なく来られる時間設定が求められることから、13時～16時とした。またこの時は年齢制限を設けていない。これも県立中央図書館からの要望であった。参加者は、18名(12歳以下8名、13～20歳2名、31～40歳4名、41～50歳3名、51～60歳1名)であった。時間が3時間となったため、UD絵本の説明などを30分、作品制

作に2時間、作品紹介を30分とした。小学校低学年も参加していたため、アンケートでも、「話が長くて退屈だった」「早く作りたかった」という感想が寄せられている。幅広い年代の参加者を対象とした場合、説明の内容に工夫が必要であることを考えさせられた。

### 2-2-2 浜松市みをつくし文化センター(9月1日)

「ユニバーサルデザインと健康フェスタ」の一部として、UD絵本コンクール2012入賞作品などの展示と合わせて行った。他の企画も楽しんでもらう時間をとりたいたいで、13時から16時までとなった。内容は、静岡県立中央図書館で開催した時と同じように、UD絵本の説明などを30分、作品制作に2時間、作品紹介を30分である。対象は小学生とし、3年生以下は保護者同伴で募集した。なお、以降この年度に行ったUD絵本WSの内容と対象はすべてこの会場と同様である。小学生と保護者あわせて14名の参加があった。フェスタの一環であったため、ユニバーサルデザインにある程度関心をもっている参加者が多かったと思われる。アンケートの中には、「おなじものでも少しずつ色やさわった感じがちがうこと」がわかったという回答があった。この参加者は、布の手触りの違いに注目した作品をつくっている。一方で、「簡単だと思っていたけど、意外と難しかった」という回答もあった。制作中に行き詰ってしまい、手伝いの学生たちがいろいろと提案してみるものの、次の段階になかなか進むことができない子どもがいた。子どもの自由な発想をいかしつつ、サポートすることのむずかしさを感じた。

### 2-2-3 浜松市立佐久間図書館(10月9日)

対象、内容は2-2-2と同じで、参加者は子どもと保護者及び地元のボランティアの人も参加されて12名であった。会場が独立した一室ではなく閲覧室の一部であった。このため、制作の様子や作品紹介は、図書館の来館者は誰でも見ることができた。高齢者の方の「子どもたちが楽しそうに物を作っている様子を見ると元気がもらえる」との感想が印象に残っている。

### 2-2-4 浜松市立南図書館

対象、内容は2-2-2と同じで、参加者は子どもと保護者を合わせて15名であった。会場は図書館併設の南協働センター2階の会議室である。2-2-2の時と同様で、今回も子どもの自由な発想を生かすことと、UD絵本の一場面として完成させることの難しさを考えさせられた。材料を手にして1つのものを完成させることに熱中したものの、ではそれを絵本の一場面はどう生かすかまでは思い至らなかった子どもがいた。参加した子どもたちに楽しんでもらうだけでなく、UDへの関心を深めるといふ本来の目的につなげるために、最初の説明を含めた工夫が必要であると考えさせられた。

### 2-2-5 浜松市立南陽図書館

対象、内容、会場とも、2-2-2と同じで、参加者は子どもと保護者を合わせて8名であった。今回は、これまでの反省に基づき、見えない状態で触って感じる体験ができるように箱を用意した。箱の中には、さまざまな形を色

紙や薄い布、分厚い布、ボール紙などで貼り付けた台紙が入っている。箱の中に手をいれて台紙をさわって、見ながら触った場合と見えない状態で触った場合の違いを感じてもらう。この箱を使うことで、さわただけでは微妙な形の違いを感じ取ることが難しいこと、模様が違ってもしざわりはそれほど変わらないものがあることなどを体験させることを目的としていた。また、台紙に貼り付けた△や□の触るだけで数える試みも行った。これは、見えない状態では、同じものを繰り返し数えてしまう可能性があることを体験させることが目的である。アンケートに「さわってみて分かる物は「ふわふわ」「ざらざら」「ぼこぼこ」だった」という回答があったのは、この箱の効果といえる。また保護者からは、「子どもの思うままに絵本を作ると子どもの世界が見られて嬉しいです」、「子どもとこのような時間をなかなかゆっくりとてないの、いい時間を過ごせました。」という回答があった。一緒に制作することが、保護者と子どもが触れ合う機会となっているようである。

### 2-2-6 浜松市立佐久間図書館

対象、内容、会場とも同じ図書館で10月に行った時と同じであり、参加者は、子どもと保護者あわせて13名であった。10月に参加して楽しかったのでまた参加した、という子どもや、10月に参加した友達から話を聞いて、という子どもがいた。2-2-5で使った箱を持っていったことで、「ユニバーサルデザインとは、ということ箱の中のものを触ってみたい具体的に教えて頂きとても分かりやすかったです。」とアンケートに回答した参加者がいる。また、「学校の工作の授業ではうまくできなかつたけど皆のつくっているのをみながらつくったうまくできた。」という感想もあった。異なる学年の子どもたちが、交流することで、お互いに刺激を受けながら作品を作っていく様子が見られる。

### 2-3UD 絵本 WS2014(8月まで)

#### 2-3-1 静岡県立中央図書館(4月21日)

2013年度に続き、静岡県立中央図書館で、UD絵本コンクール作品展示の期間中に開催した。時間、内容、対象は2-2-1と同じであるが、参加者14名の年齢は、就学前から61歳以上までと差が広がっていた。参加者の年齢差があることで、説明の内容や時間には配慮が必要となる。一方で、作品に多様性が見られたことは利点といえる。「他の人々の作品からもおもしろい発想にふれられてよかった。」という意見があり、2-2-6でも見られた、異なる世代の人々が作品を通して交流する場所となっているといえる。

#### 2-3-2 浜松市立積志図書館(5月25日)

時間、内容、対象は、2-2-2と同様であり、参加者は子どもと保護者を合わせて13名であった。今回は、子どもの参加者の約半数が、すでにユニバーサルデザインについて学校で習っている4年生、5年生であった。参加の理由として、ユニバーサルデザインのこともっと知りたかったから、を選んだ子どもがいる。この子は、作品をつくった感想として「みんなに分かりやすく作るのはむずかしかったです」と書き、「ユニバーサルデザインが使われているところをもっとたくさん知りたいです。」と書いてい

る。この子どもの場合、学校で生じた興味が、WSを通してさらに高まったといえる。

また、作品の構想が浮かばないため、保護者と一緒に図書館で絵本などを見てきて制作に取り組んだ子どももいた。図書館で行う利点といえる。

### 2-3-3 浜松市立東図書館(6月22日)

時間、内容、対象とも2-2-2と同様であり、参加者は子どもと保護者を合わせて20名であった。子どもの参加者の半数以上が4年生以上であり、そのうち3名が参加理由として、ユニバーサルデザインのこともっと知りたかったから、を選んでいる。「作った絵本を、目の見えない人にも読んで楽しんでもらいたい」という希望もあった。

### 2-3-4 浜松市立南陽図書館(7月6日)

時間、内容、対象とも2-2-2と同様であり、参加者は子どもと保護者を合わせて22名であった。アンケートに「ユニバーサルデザインってすごいな!!」と書いた子どもが、同時に「バリアフリーとユニバーサルデザインの違いがよくわかりません。」とも書いていた。この違いを説明することは難しい。また保護者の方から、「自分にとってふつうなことが見方を変えると違うとらえ方になることを考えさせられました」。そして「すべての人に『良い』ことは難しく」とも書かれていた。

### 2-3-5 浜松市立南図書館(8月7日)

時間、対象、内容は2-2-2と同様であり、参加者は子どもと保護者を合わせて20名であった。小学校の夏休み期間ではあるが平日開催である。そのためか、これまでのWSに比べると保護者の参加は少なかった。また学齢前の子どもも含め小学校低学年が多かったためか、アンケートを見ると、作った楽しさだけが残っているのではないかと、と思われる子どももいた。今回のアンケートでは、小学校3年生からは、「ポスターのユニバーサルデザインはあるのかなと思いました」や「不自由な人は手ざわりをどういうふうにみわけるとか知りたいです」といった質問がでてくる。今は理解できていなくても、楽しんだ記憶とともに思い出してもらえるように、また保護者と一緒ではなかった子どもが自宅でも取り組めるように文書を作った方がよいのではないかと、考えさせられた。

## 3. ワークショップ開催の中で明らかになった効果と課題

### 3-1 効果

楽しかった記憶とともに「ユニバーサルデザイン」という言葉や、自分とも異なる生活をしている人がいることを心にとどめてくれた子どもたちがいたと考えられる。特に学校ですでに「ユニバーサルデザイン」について学習している子どもの場合、「UD絵本」というものが存在しており、それを必要としている人たちがいることを多少は認識してくれたように思う。一方で、保護者と一緒にきた低学年の子どもの場合、家庭に帰ってから話し合う機会があると期待できる。

予想していなかった効果として、保護者と子どもの交流の機会となることであった。「子どもの思うままに絵本を

作ると子どもの世界が見られて嬉しいです」。「子どもの発想をくずさないように、子どもにまかせて少し手助けしながら作りました。子どもだけでも十分色々な考えや思いを持って作れてすごいなと思いました。」といった回答から、うかがうことができる。用意した材料はどれも身近にあるものだが、限れた時間の中で作るという制約があることが家庭内での活動とは違ったものになるのかもしれない。

参加している子どもたち同士や、子どもと学生という異なる年代の交流の場となっていることも効果としてあげることができる。絵本制作という同じ目的をもつことが、交流を促進させているのであろう。学生の協力はまた、子どもたちの作品にも影響を与える。割ピンを使うなど、さわる、動かす、音を出すための工夫や多様な表現方法を知ることによって、子どもたちのアイデアが広がるあるいは具体的な形となる。

### 3-2 課題

第一の課題は、「ユニバーサルデザイン」についての説明方法である。参加者の年齢や時間の制約はあるが、参加者の記憶にとどめられる説明方法を工夫していきたい。「不自由な人は手ざわりをどういうふうにみわけるとか知りたいたい」、「どんな人が生活が不自由なのか」という質問があることから、当事者に参加してもらうことも考えられる。

第二の課題は、「UD絵本」のレベルを高めることである。第一の課題と関係してくるが、作り手が「さわってわかるように」と考えても、読み手に伝わるとは限らない。しかし、「伝わらない場合がある」ことを知らせることは、参加者の努力を否定することにつながる恐れがある。子どもたちに意欲を失わさせることなく、伝える方法を考えていきたい。

第三の課題は、芸術作品としてのレベルであろう。子どもたちの自由な発想を大事にしつつ、アイデアを形にする技術を教えたり、アイデア自体を発展させるためにできることはないだろうか。これまで、学生の協力で形になった作品はあった。ただ、手伝ってくれる学生は毎回同じではない。学生が違っても一定のレベルを維持できる方法を考えていきたい。

2014年度は、10月に3回、12月、2月、3月にそれぞれ1回ずつ、合計6回の開催予定がある。UD研究の先生方にご意見をいただきながら、この三点の課題について考え、UD絵本WSを発展させていきたい。

なお、本ワークショップは、平成24年度・25年度・26年度の「静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター長特別研究」の補助を受けて行われた。3年間、12回にわたってワークショップを開催することができたのは、ご協力いただいた本学のUD研究の先生方、手伝ってくれた学生たち、開催場所を提供して下さった方々のおかげである。特に、デザイン学部の卒業生清水麻子氏の協力なしには続けることはできなかった。この場を借りて御礼を申し上げる。

### 注

これは本学卒業生の清水麻子の手による。

